

## 「川越市日中友好協会設立10周年」記念講演原稿

新年好！日中友好映画祭実行委員会のコウチュウと申します。

川越市日中友好協会設立10周年、本当におめでとうございます。

今日はこの記念すべき日に、お招きをいただきまして、とても光栄です。

日中国交正常化以来、両国のたくさんの方々がいろんな困難を乗り越えて、日中の友好関係を大きく発展させてきましたが、昨年9月からの尖閣諸島問題で、日中関係はまるで一気に国交正常化実現前の状態にもどってしまったような厳しさを見せています。

40周年を記念して企画された文化事業の80%以上ものがキャンセルされてしまっ  
て、経済、観光交流などの面でも大きな損害がありました。

その深刻な状況は今日まで続いていますので、日中間のさまざまな交流事業に携わ  
る日中両国の関係者に一種の無力感が広がっています。

しかし、こういう時に、「川越市日中友好協会」の設立10周年記念日を迎えられて、  
大勢の日中関係者が会場にお集まりいただきまして、今後の日中関係に感心を持ち、  
日中問題を改善するために、一緒に真剣に対策を考えて、未来を語ることは  
本当に素晴らしいことです。心から皆様の日中友好へ対する熱意に尊敬の意を表し  
たいと思います。

日中友好の道を歩んで来た先輩たちの前で、私が話をするのは非常に恐縮ですが、  
自分が日本に来て、感じたこと、体験したこと、そしてなぜ女優になったのか、なぜ日  
中文化交流活動に携わったのかを話させていただきたいと思います。私が日本人に  
助けられて、映画との出会い、優しい日本人との巡り合い、私の日本への感謝の気  
持ちは皆さんに伝えたいと思います。

私は南京の生まれです。8歳からバレエを習い、10歳から中国の新体操選手とし  
て選ばれて、9年間ナショナルチームで過ごしてきました。

1989年に初めて日本に来た時に、右も左も分からなかった。そんな私が女優にな  
るという夢をもち続け、叶えることができたのは、日本で出会った人たちのおかげとい  
っても過言ではありません。

私が出会った皆さんは損得抜きで、外国人の私を助けてくださいました。

日本の皆さんのやさしい気持ちは、私が来日前に抱いていた日本人への警戒心や先  
入観を取り除き、日本で生活の心地よく手応えのあるものにしてくれました。そして、  
中日両国の間にある誤解や偏見を解いて互いの本当の姿を伝えたい、理解しあう糸  
口を作りたいという目標を、私の人生に与えてくれました。

今も、この思いは私の大きな原動力になっています。

私は日本来る前に全然日本語を喋れなかったのですが、来日して三日も経てない内に、日本にいた姉と大喧嘩して、半年も口を聞いてくれなかったことがありました。原因は私が日本の習慣が分からなかったから、強く注意されたからです。仕方なく、自分でアルバイトを探しに行きました。

留学生の友達の紹介で、神田の日本蕎麦屋さんでアルバイトをすることにしました。仕事の内容は料理のお運びと掃除でした。簡単な仕事でしたが、実社会で働いたことのない私にとっては初めての経験ばかりです。

日本語も分からない私は店長の指示さえ分からなかった、料理を運ぶのも危なかった。最初はまるで役に立たなかったと思います。しかし、お店のご主人もおかみさんも長い目であたたかく見守ってくれました。お店の他の人も暇の時に私に日本語を教えてくださいました。

お蕎麦屋さんで働いてみて驚いたのは、ただのアルバイトである私を親身に面倒見てくれたことです。姉夫婦から自立して日本の大学で勉強したいという話を聞いて、ご主人は自分の娘のここのよう私を応援してくれました。

おかみさんは、日本食に慣れない私に中華料理を作ってくれたり、ひどい風邪を引いた時は店の近所にホテルをとって、そこで看病をしてくれたこともありました。

縁もゆかりもない外国人に、そこまでしてくれる人は、中国でも滅多にいません。

忘れられないのは、中国新体操ナショナルチームの仲間が国際大会で東京に来た時に、私が選手とコーチを10何人お店に連れて行った時のことです。おかみさんは「耿忠さんの友達ならば」と一家をあげて歓迎してくれて、特製の釜飯でもてなしてくれました。私だけでなく友人まで心にかけてくれたやさしさには、今も心の底から感謝しています。

お蕎麦屋さんには、ご主人やおかみさんだけでなく、おばあちゃんと娘さんにも、よくしていただきました。

休み時間に二階の茶道教室へ案内されて、お茶をたててくれたり、初めて映画中で見た日本の茶道を体験しました。娘さんは普段日舞を習っていますので、私も踊りができると知ってしまったら、日舞のお稽古場に連れて行ってきて、日舞を教えてくださいました。日本の伝統文化や古くからの習慣なども私に教えてくださいました。日本人のもつ文化の魅力を自然に教えてくれて、その時、私が日本に来て本当によかったと思いました。

また娘さんの日舞の衣装や、おばあちゃんの着物姿を見ているうちに、私も着物が大好きになりました。花火の時に、私に浴衣を着せてくれて、日本で成人式を迎えた私に娘さんの振りそでを貸してくれて、綺麗に着させてくれました。

私が日本での生活をスタートできたのも、伝統的な文化や習慣にふれて伝統文化が好きになり日本の心に近づけたのも、お蕎麦屋さん一家のおかげです。損得や打算とは関係ない、心の深いところで私を応援してくれました。

そこでアルバイトをしながら教わった日本の礼儀と作法は私の宝物となっています。そのお蕎麦屋のお父さん、お母さん、娘さんには心から感謝しています。彼らの親切と優しさで、私の日本人へ対する印象が大きく変わりました。

また、ひとりひとりの支えがあったから、何度心が折れそうになった自分自身を信じて、日本で女優になる夢の一步を踏み出すことができたのです。

それは日本に来て一年半が経った頃のことでした。ある日、母から電話があって、私の新体操ダンス先生の旦那さまが「女子健美気功」の映画を作るので、是非私に主演で出演してほしいという依頼があったと言うのです。母が、私が日本に行ったことを伝えたら余計興味を持って、是非コウチュウにこの映画に出演して、「女子健美気功」を覚えて、日本の皆さんにも教えてあげてくださいと母に言ったそうです。母が先生の話聞いて、私のためになるいいことと思って、すぐ私に電話して、私に早く帰って来いと言ったのですが、私はお蕎麦屋のアルバイトは休めないで、すぐ帰れないと伝えました。ところがその話をお蕎麦屋のお母さんが後ほど知って、逆に私を喫茶店に呼んで、これはあなたが女優になるチャンスの一歩だから、失ってはいけないと言われました。アルバイトのことは心配しないで、早く南京へ帰って映画に出なさい、撮影が終わったらまたお店に戻って来れば良いと言われました。そして最後に私に5万円の餞別までくださいました。

なんと優しいお母だろうと思い、思わず涙を流しました…。

私はおかあさんの話を聞いて南京へ戻り、映画に出演しました。両親や南京の友達に、日本のお蕎麦屋さん一家に出会って、親切にしてくれたことを教えてあげたら、皆も感激して、母が蕎麦屋のお父さんとお母さんにお礼の手紙を書きました。

私は本当にその映画のお陰で、女優としてデビュー出来たし、「女子健美気功」も覚えられて、日本に戻って来た後に、大学の先生の紹介で、「セントラルフィットネスクラブ」で健美気功を日本の皆さんに教えることが出来ました。

そのころ、日本で気功を教える中国の先生は少なく、若い女性で、健美気功を教えたのは私だけでしたかも知れません。その所為かフィットネスクラブでも人気者になりました。クラブの生徒さんたちはおばあちゃんが多くて、気功のレッスンは終了後に、いつも私のことを娘のようにかわいがってくれました。お茶に誘ってくれて、日本女性のマナーを教えてくれたり、時には自宅にまで誘って、食事の作り方を教えてくれたり、演劇まで一緒に観に行ったりしました。

どれもこれも、学校の授業では学べない日本の姿。お蕎麦屋さん一家と同じように、皆さんもとてもやさしく、裏表なく私を支え、私の夢を応援してくれました。

私が来日するまでに、日本人に対して勝手なイメージを作り上げ、それを疑いもしませんでした。ところが日本に来て実際に出会ったのは、真心があってやさしく礼儀正しい日本人ばかりでした。

皆様への感謝の気持ち、私が出会った日本人の本当の姿を、南京の両親に、家族に、中国の友人たちに伝えて上げたい。また、お世話になった日本の人たちにも、おおらかで包容力のある中国人の姿や、中国の発展、中国人の考え方を伝えたいと思いました。

この思いが、私が中日文化交流に取り組むようになったきっかけであり、今もなお持ち続けている原動力です。中国と日本の心をつなぐお手伝いは、その時から私のライフワークになりました。

私が日本で女優になったのは、1998年でした。その時、日本大学芸術学部を卒業して、まもなく松竹の映画『ラブ・レター』のオーディションがありました。私は300人以上の面接者の中から選ばれて、中井貴一さんの相手役としてヒロインの白蘭役を演じました。原作は浅田次郎先生の「ぽっぽや」中の短編小説でしたが、私も事前に本を読んで感動しました。『ラブ・レター』で私が演じたヒロイン・白蘭は、偽装結婚で日本にきた中国人。知る人もいない片田舎の町で水商売に身をやつし、遠く離れた故郷の家族に仕送りをする女性です。貧しく、親しい友達もおらず、支えてくれる家族もない。社会の底辺ともいえるところで懸命に生きながらも、病を得て一人孤独に死んでいく。そんなヒロインが、たったひとつの生きる「縁」にしていたのが、偽装結婚の相手への思い。出す宛もなく夫への感謝と愛を綴った手紙が彼女の死後に発見され、彼女の遺品を引き取りにきた夫によって、読み上げられます。

映画完成後に、スクリーンの中で読み上げられるヒロインの手紙に号泣している日本人の観客が、元々偽装結婚についての理解が難しかったと思いますが、しかし映画『ラブ・レター』は、わずかの時間で、白蘭という女性の生き様を通して、中国と日本の中に横たわる現実を、観客に理解させることが出来たと思います。しかも、悲しい現実には振り回される人間の心の機微まで、観る人にダイレクトに届いて、心を動かすことができたのです。

「映画・映像に国境や国籍の壁はない。見る人の背負う文化や背景を軽々と飛び越えて、人と人、国と国を、きっと結びつけることができる！」。私という人間の土台をつくった祖国・中国と、夢を支え育ててくれた日本の文化や心。ふたつを結ぶ方法を探していた私にとって、これは天啓だと思いました。その時、私の進むべき道が見えました。映画・映像を通して中国と日本の心をつなぐことは、私の使命になったのです。

映画デビューの翌年、1999年私がムーランプロモーションという会社を作って、初めての日中が合作ドラマを作りました。「日中国交正常化30周年」を記念して、上海電影集団が日中合作20話連続ドラマ「ロング・ラブ」を作ろうと計画しました。

しかし、文化も仕事の習慣も違いの日中映画スタッフが一緒になって、一つの合作ドラマを作るのは、そんなに難しいことだとは夢にも思わなかったのです。

私は日本語ができて日本でデビューした中国女優として、その合作ドラマの主演女優の一人に選ばれました。でもそのうち、日中間の言葉の問題もあり、中国側から日本テレビ局への連絡、日本のスポンサー探し、スタッフや役者の手配、ロケ地とのいろいろな交渉などの作業も全部頼まれて、知らない内に、私は女優と同時に日本側のプロデューサーになっていました。

また、当時日中合作ケースは元々少なかったし、何回か合作経験したテレビ局も騙されたことがあって、中国側を信用出来ないから、この合作ドラマの話には乗れないとほとんどの会社から言われました。

私はその頃の中国テレビ業界や、映画業界のことがよく分からなかったので、日本人からそういう風に言われたのは、きっとどこかに原因があるにしても、全ての中国人が詐欺師ではないと思い、せめて私が関わっているチームの仕事では、絶対約束を守って、信用を取り戻そうと思いました。最後自分が設立したばかりの会社、ムーンプロモーションで日本側の投資を全部背負って、上海電影集団と一緒に合作ドラマを作り始めました。

ドラマの内容は、三人の中国女性が日本にお嫁に来て、日本の三人男性と国際結婚して、各カップルと各家庭で展開したラブストーリーです。

まず、中国と日本では、撮影現場の雰囲気はまるで違うのです。私自身経験が浅かったのですが、プロデューサー兼主演女優を務めました。毎日台詞を覚えながら現場の調整を考えて、メイクする間に、スタッフのお弁当も手配するとか、非常に忙しい毎日でした。

中国の現場はとてもおおらかです。段取りもおおよそのことを決めて、細かい部分は現場で判断。スケジュールが現場の状況で変更されることも少なくありません。天候や不測の事態が頻繁に起こりうる状況下では、これはこれで一つのやり方です。

それに対して日本の現場は万事がきちり。段取りがよくてスケジュールも厳密、監督と助監督、カメラマンと助手の上下関係もはっきりしている。現場もシーンと静かです。日本のことを多少知っている私にとっては、とても日本らしい雰囲気で、これはこれで好ましいのですが、中国側のスタッフにしてみれば、窮屈そうに見えるかも知れません。

どちらがいいとか悪いということではなく、お互いの常識が違うだけ。その違いを理解して折り合いをつけられるところをまで歩み寄ればいい話なのですが、お互いの主張があるから、時には感情的にもつれてしまって收拾が付きません。

騒ぎが起きるたびに撮影を中断して、私がメイクをしながら双方の間に入って話し合いをする日常でした。

現場プロデューサーを引き受けたときからそう覚悟は決めていましたが、そんな私が「もうダメだ…」と諦めかけた瞬間が一度だけありました。

事件が起こったのは、福井での撮影中。まもなく春節を迎えようという頃のことでした。

撮影現場の座敷奥にある部屋で、次の場面のために衣装チェンジをしていた私の耳に、突然怒鳴り声が響きました。「もう、こんな現場やっつけられるかっ!」。中国語と日本語の怒鳴り声が、互いに聞く耳をもたないという調子で続いています。これは、いつもの衝突とは、様子が違う。嫌な予感がしました。

私が慌てて駆けつけると、中国人スタッフと日本人スタッフが、殴り掛からんばかりの勢いで対峙しています。とうとう、この日が来たかと思いました……。

正直言って、福井の撮影現場はいつ爆発してもおかしくない状態でした。この年の福井は、20年ぶりの大雪。土地の人も驚くほどの寒さでした。くる日もくる日も空はどんよりと曇って、ただでさえ気分は落ち込みがちです。

おまけに長引く撮影にキャストもスタッフも疲労困憊。積もり積もった不満に、とうとう火がついてしまいました。騒ぎの発端は、ささいな生活習慣のちがいです。このときの撮影現場は、福井・三方町の古い日本家屋で食事のシーンを撮る予定でした。畳を敷いた座敷での場면을撮ろうと準備をしていた時、中国側の照明スタッフや美術スタッフが機材をセッティングしようと、靴を履いたまま座敷にあがってしまったということです。止める間もない、あっという間のできごと。

これに日本側のスタッフが「畳に土足であがるとは何事か!」と猛烈に起こり出し、しかし中国側も今日ばかりは一步も譲らず、激しい怒鳴りあい……。

話を聞いてみれば、たしかに中国側が悪い。畳は日本人にとって大切なもの。スリッパであがってはいけない場所です。知らなかったとはいえ、それにズカズカと土足で上がりこんだことは、責められても仕方ありません。

ただ、彼らを一方的に責めても何の解決にもなりません、日本の習慣と常識を教えて上げないと、理解できないし、状況はますます悪くなるしかないでしょう。

私はその場で中国側のスタッフに日本の畳伝統文化のことを説明、日本側のスタッフの気持ちを理解求めた。すこし時間を掛けて、何とか皆が靴を抜いて、撮影現場を再開した。でも、あの日の撮影現場はしんと静まり、必要以外の会話は聞こえませんでした。単なる作業を行ってもいい作品を作れないので、とても心配になりました。

どうしたら、撮影がスタートしたばかりの頃のような一体感が取り戻せるのか。どうやったら、互いを思いやれる気持ちの余裕を取り戻せるのか、ずっと考えました。

暫くして、中国の春節という季節が近づいて来ました。春節は中国人にとって、一年で一番大切な祝日。ふだん故郷を遠く離れて暮らしている人でも、この日ばかりは帰郷し家族と共に新しい年を祝うという大切な節目。

それなのに押しに押ししたスケジュールのために、中国のスタッフが春節でも家族のもとへ帰れない。ただでさえ慣れない日本、それも寒くて暗い冬の福井に一カ月以上いるのです。おまけに中国語の通じない環境では自分の意見さえ思うように伝えられない。しかも食事は口に合わない日本食ばかり。魚と味噌汁には、みなもうウンザリ。彼らの我慢は限界をとっくに超えていました。そんな中国側スタッフのために、なににかけてあげられることはないだろうか。思い悩んで眠れない日が続いたある朝、思いきって丸1日映画のことを忘れてみてはどうだろうかというアイデアが頭に浮かびました。そして、日本のよさを満喫できるところで、春節・旧正月を祝おう。

春節大晦日の日に、撮影計画を丸1日中止してのバス旅行が決行されました。総勢40人以上、日中スタッフを貸し切りバスに詰め込んで京都へ行きました。約束事は、ただひとつ。今日だけは、仕事も現場も一切忘れること。

出発直後の時に車内はまだ静かな雰囲気でしたが、京都につく頃にはいくらかやわらかい話と笑い声を聞こえはじめました。

憧れの京都に行けるうれしさが、中国人スタッフの表情を見る見るうちに快活なものにしていきます。目的地のお寺や神社では、中国人が日本人に何やら質問する姿や、日本人が境内を案内する姿さえ見えます。

観光の後、京都で熱々の鍋料理を皆で食べて、日中のスタッフが紹興酒と日本酒で乾杯しているうちに、昨日までお互いに口をきかなかった仲とは思えないほどの打ち解けぶりに。旅を終えて福井に帰り着く頃には、車内の空気は一気に明るく変わりました。

驚いたのは翌日から再開された現場の雰囲気。昨日までとはまるで違います。一触即発のあの日のできごとがうそのように、現場に活気が戻ってきました。仕事ヌキに1日つきあってみることで、日本側スタッフは、慣れない外国の現場に長らくいなければならぬ中国側スタッフの気持ちを察したのでしょう。焼き魚と味噌汁の日本式朝食には飽きたらうと、中国式におかゆの朝食を用意してくれるようになりました。

中国側のスタッフの表情からも、こわばりがなくなりました。積極的に日本の習慣を学ぼうと気を遣う場面さえ見られます。見違えるほど現場の動きが変わりはじめたのです。

その後も小さな衝突は何回かありましたが、いい作品を作りたいという思いは同じ。絡まった糸をほどくように、粘り強く誤解を解いて互いの理解を深めていくことで、むしろ絆は強まっていったような気がします。

できあがったドラマは中国と日本のキャストと監督、スタッフが力を合わせて作ったものなので、特別な意味を持つ、共同作業で新しいものを生み出すことのおもしろさ、意義を教えてくれた記念すべき作品になりました。

私たちにとっては文字通り日中混血の子供のように大切な作品になりました。撮影にかかった日数は全部で100日間。この100日間は、普通の人の10年間に相当するほど、私にとって内容の濃いものになりました。学校や本で勉強する何百倍ものことを学べたように思います。

『LONG LOVE～遠嫁日本～』で気づいたのは、何かを共同で作り上げようと思ったら、否応なく相手との違いや共通点を認識せざるを得ないこと。それは相手を知ることであると同時に、自分自身が浮き彫りにされることでもありました。

中国と日本が手を取り合うことは、相手の文化を知ることだけでなく、自国の文化をより深く掘り下げる作業でもありました。そして対話を重ねることで、両国により深い絆が生まれていく。その現場を目撃できたことは意義深いことでした。

友達同士でも、夫婦でも行き違いはあるけれど、諦めずに話をすれば誤解は解ける。国と国も粘り強く気持ちを伝えれば、心は通じる。

「ロング・ラブ」以降、ムーランプロモーションもその経験を生かして、いくつ合作ドラマと映画に関わりましたが、映像の力を信じて、もっと幅広く、もっと印象的に、もっと効率よく、中国と日本の今の空気、生きて動き続ける今の社会を伝える方法はないだろうか…。

そう考えた時に、あるところが私に中国で日本映画祭をやりませんかと提案されまして、「そうだ！中国と日本で映画祭をやろう！」と思いつき、映画はその国の鏡でもある、一番自然にその国の文化を反映できる芸術です。日中の新しい映画を両国の皆さんに紹介し、真実な文化と社会現象、若者の考え方を両国の観客に紹介しましょうと決めました。特に中国では、日本映画が劇場で公開される機会が少ないので、映画祭中での上映ならば、公開枠の制限がなく、きちんとした劇場で上映できるし、一般の観客にも見てもらえます。

映画を通じて、お互いへの理解が深まり、友好の絆はさらに大きく強くなれば嬉しいと思いました。

この日から、中国と日本を映画でつなぐ「日中友好映画祭」への道が、私の前に開けました。

口で言うとは簡単なことのように聞こえますが、いざ実現しようと思うと、これが難問山積。大きなイベントを立ち上げるには莫大な費用もかかります、中日政両国政府や、映画団体、会社などの協力は欠かせないことです。著作権や肖像権、放映権の問題



も大きい。特に権利関係の問題は大きなハードルとして私たちの前に立ちはだかりました。

私たちはテレビ局や配給会社、制作プロダクションとの交渉をすると同時に、スポンサー探しも自分たちでやりました。

しかし、経験がない私にとって、協賛スポンサー探しは映画関係者への説得以上に難航。企業としても、新規イベント、メリットを予測できないイベントに出資するのは、極めて難しい。

しかもタイミングとしても最悪の状況下。第1回の日本映画週間を中国で行う年は、2006年でした。その時は、ちょうど小泉首相の靖国神社参拝によって中国での反日感情が高まり、日中関係はこれ以上ないほどに冷え込んでいる時期でした。

そんな中でスポンサー企業や関係者を説得するのは、より一層難しかった。『LONG LOVE～遠嫁日本～』の現場を乗り切った私にとっても根気のいる、骨の折れる仕事でした。

ただ、当時の私には、ひとつの確信がありました。映画交流は中国と日本の関係が難しい時だからこそ、大切な役割を果たすのだと信じていました。

映画を通じて、お互いの社会の本当の姿を一般の人々に伝えられたら、正しく理解してもらえたら、きっと無用な敵対感情はなりをひそめる。経済や政治、文化や技術、観光などの交流も、もっとスムーズになると思います。

その確信を胸に、私が何かあっても、2006年は上海と北京で”日本映画週間”をやりましょう！決めました。

自分が立ち直って動き出したら、メインスポンサーに名乗りをあげてくれる企業も現れました。それが、今に至るまでおつきあいをいただいている大塚製薬でした。最初に、その一報を聞いた時は、本当にうれしかった。

その後、トヨタ自動車やアサヒビール、森ビルなど日本を代表する大企業も私たちの主旨を理解していただいて、スポンサーになっていただきました。それで何とか映画祭を開催する環境が整っていました。

次は作品の選定とゲストの要請です、また、開催地の開幕式会場、交流会の会場、映画上映映画館の下見と条件などの交渉、現地運営スタッフの依頼、チケットの販売手配、事前宣伝、観客、メディア動員などのことも全部自分たちは一からやりました。

2006年の6月。上海で初の「日本 映画週間」が幕を開きました。たくさんの観客とメディアが来ていただいて、900人の会場は満員で行いました。12本の日本映画を上海の4ヶ所の映画館で上映し、ほとんど毎回満員状態でした。その盛況が私を励まし、同年の11月には北京でも「日本映画週間」を開催しました。

12月には東京で第一回の「中国映画週間」を実施しました。満場の観客がスクリーンに描き出される物語に泣いたり笑ったりする姿を見て、すべての苦勞が報われる思

いでした。「何度も壁にぶつかったけれど、この日を信じて走ってきてよかった…。会場を見渡す目に涙がにじみました。本当にやってよかった。

「継続は力なり。日中映画祭は今年で8年目に入ります。毎回10本以上の新作映画を日中両国で紹介し、映画の輪をどんどん広げ、日中の観客もお互いに映画を通じて理解を深めた。」今を伝える優れた作品との出会いとともに、この映画祭のもうひとつの財産ともいえるのが両国の映画人同士の交流。毎回多彩なゲストが集まる中で、監督と俳優、監督と制作プロダクションといった出会いがあり、新しい関係性が結ばれるのは大きな楽しみ。私自身、この場での出会いをとっても大切にしています。

「2006 上海・日本映画週間」にお招きした栗原小巻さんは、私の憧れの人。彼女は80年代に中国全土で大ヒットした映画『愛と死』や『サンダカン八番娼館 望郷』の主演女優にして、中国では知らない人のない大スター。

さらに日中合作映画『乳泉村の子』出演をきっかけに、中日の交流に長らく尽くしてきた志の持ち主。いわば女優としても、中日文化交流に関わる立場としても、目指すべき偉大な存在。素晴らしい先輩にお目にかかれたことは、私にとって大きな励みになりました。

栗原さんが毎年欠かさず「日中友好映画祭」を応援してくださっていることは、私の誇りです。私は栗原さんを心から尊敬していますが、彼女は逆に私には日中映画交流はあなたたち若い世代に託したい、いつでも応援しますので、諦めずに頑張ってくださいと励ましていただきました。私は必ず栗原さんの期待に答えるように頑張りたいと約束しました。

若い世代の交流はまず今の日中の若者の考え方や、お互いの付き合い方を知ることが大事で、日中の未来の交流と発展にとっても大切な役割を果たしてくれると思います。

中国では若者に、日本或いは日本人の対するイメージを聞くと、まず65%以上の人が歴史問題を言いたすことが多いですが、必ずしも反日ではないと思います。

そういう条件反射的に「日中歴史問題」と結び付くのは、学校での教育はまだ客観的なのですが、家庭教育とマスコミ誘導の影響が極めて大きいと思います。

実際には、多くの大学生は、“歴史はいろいろな問題を残しているが、我々は前向きであり、ずっとこういう問題に巻き込まれたくない。”

“日本人が優しい人が多い。あの戦争さえなければ、日本人は世界一善良な人かもしれない。”

日本人嫌いの人は、47%、よく分からない人は、42%、その他9%の人は「日本人がとても好き」と答えました。

ある日系企業で就職している若者が記者に「私は反日教育を受けていると思わないです」と言いましたが、ただし、中国では日本の対中国援助への認知が少ないかも知れません。例えば「北京空港、上海空港は実は日本のODAで建設したことや、1980年～2008年まで日本のODA援助で、日本語を勉強した中国人は非常に多いことなどです。

今の若者は昔と違って、歴史問題、政治を勉強と同時に、日本の高い技術、サービス、ファッション、アニメなどにも高い関心を持ち、映画や、ドラマ、インターネットで日本の最新事情を知り、大都会の若者の考え方は日本の若者にとっても近いのです。

日本語を学ぶ人も増えて来て、毎回日本映画週間のゲストが中国の映画館でファンの皆さんと交流する時に、劇場に来ている中国のファンたちは皆日本語で質問したり、声援もみんな日本語でしたので、ゲストの皆さんはけっこう驚くのと同時に喜んでいました。

一方、日本の若者も中国の伝統文化、建築、宗教、食品安全問題、交通事情、サービスに感心を持ち、中国の京劇や、映画をよく観るし、人気役者のこともすごく研究しています。

毎年東京で行う「中国映画週間」が始まる前に、いつも問い合わせが多くて、今年作品は何ですか？役者が誰か来ますか？あの映画のロケ地はどこですか？といういろいろ聞かれます。彼らは映画を通じて、日中新しい文化、流行、社会問題などを知り、両方の考え方について話し合っています（ネットでもよく見かける）。私たちはそうした日中の映画ファンのために、一生懸命準備し、どんな困難があっても続けようと決心しています。

2010年の「尖閣の船事件」の時も、たくさんのイベントが中止になりましたが、みんなが中国映画週間の開催を心配してくれましたし、スタッフたちも不安を感じていました。そして、予約している会場からも全部前金を支払わないと、場所を貸さないとわれ、スポンサーも次々と降りました。それでも、スタッフと共に頑張って、いろいろな困難を乗り越えて、予定通りに、そしてもっと規模を拡大して行いました。

2011年「3.11地震」の後も、中国・日本映画週間」中で、震災地で撮影した映画を選んで、北京と上海で上映しました。震災地復興応援ブース展も映画祭期間中に実施し、募金活動も現地で行いましたが、たくさんの中国の観客の皆さんも参加してくれました。

2012年は尖閣諸島国有化前からいろいろな騒動がありましたが、この時にも、中国で日本映画週間を開催し、震災後に日本が制作した新しい傑作12本を選定して、北京と上海で一週間ずつ上映しました。

中国の日本映画ファンが今まで以上に関心を高めて、毎回たくさんの観客が来場してくれました。また、日本から青山真治監督や、ウルトラマンの佐野智樹監督、「麒麟の翼」の土井裕泰監督、女優の常盤貴子、広末涼子、俳優の須賀健太、山田新太郎などのゲストが映画祭に参加し、中国の観客と友好的な交流を行い、現地で大歓迎されました。

しかし、民間の力は限られていますし、いつも政治に左右されているので、いくら努力をしても必ずと(おのずと)限界があります。日中政府同士の姿勢と対応がちゃんとしないと、今の悪化された関係を改善できないと思います。

中国に帰っても、あちこちで「日本の政権はどうなりますか？安倍さんは靖国参拝へ行きますか？日本と中国は戦争しますか？」とか質問されたり、「日本が好きだけど、今のままだと旅行に行けないですね？」と言われたり、ビジネス上も不安定で、日系企業が中国進出に慎重になって、様子見する会社が多くなってきています。

私が知っているジャーナリストは、日中問題をこういうふうに例える：“夜を日に継いでこつこつと築いてきた日中交流の砦(とりで)がもうすこしのところで完成を迎えようとしていましたが、まるでそれを狙ったかのように、日中間を震撼させる政治的地震が襲ってきます。するとまだ工事中の砦(とりで)が崩れてしまい、また一からやり直さなければならなくなります。”

まるで日中交流に携わる人々の意思を試すかのような、こうした激震があまりにも頻発するので、いつまた余震が来るか、正直すごく不安な気持ちになります。

しかし、半年ごとに中国と日本で開催してきた「日中友好映画祭」は今年で8年目に入ります。

2010年6月に、私が中国政府から「日中映画文化交流貢献賞」をいただいた時、私は非常に複雑な気持ちでした。いつも日中政治に左右されながら日中映画祭をやってきましたけれど、馬鹿にされている時も多かったし、会社が稼いだお金はほとんど毎年の映画祭に使って、社員の給料もアップできない、社員の家族にもいいサービスをさせてあげられない自分を悔しく思う時もありました。

けれど、いつも私を支えてくれるのは、やはり日中の映画ファンの皆さんたちでした。皆さんの毎年の日中映画祭へ対する期待があるからこそ、私が頑張れる。みんなと同じ空間で映画を観て、一緒に笑って、一緒に泣いて、一緒に拍手することに、最高の感動を覚える。そこには反日や反中の感情も全然ないです。みんな映像を通じてお互いの社会問題や、考え方を知り、理解をし合えるのではないかと思います。

ですから、政治的に難しい状況が度重なる中で過去一度も映画祭を中止にしたことはありませんでした。私たちを信頼して出品してくださる制作側の皆さんや、「日中映画の発展と交流なら」と快諾した日中の映画人、俳優さんや監督さんがいるから、そして何があっても変わらずに支援くださるスポンサー企業があるから、私達はもっと頑張れるようになりますし、継続できることが私達の喜びにもなります。

2012年も6月に北京と上海で「日本映画週間」を盛大に開催した後に、すぐ10月の「東京国際映画祭」中で行う「中国映画週間」の準備に入りました。

日中国交正常化40周年を記念するために、500人の宴会場と1000人が入れる開幕会場を用意したり、中国側も豪華ゲストのスケジュールを調整したり、皆さんの来日ビザまで全部発行しました。

ところが、9月12日に尖閣問題が起きて、日中両国で計画している80%の友好イベントがキャンセルか中止となりました。そうした中で、10月20日から予定していた「東京、沖縄・中国映画週間」も大きく影響を受けました。まず中国側ゲスト全員が来日中止になり、沖縄の会場も次々と問題が起こり、やむを得ず沖縄での開催を中止にしました。

しかし7年間やって来た「東京中国映画週間」を絶やしたくないという思いと、たくさん中国映画ファンの皆様を失望させたくないという思いとで、例え一縷(いちる)の望みでもあれば映画上映だけでもしたいと思い、そのことを中国側に手紙で伝えました。そしてその思いは中国側に通じたのです！

その時に、周りには反対する声も多かったのも事実です。映画祭を行っても、スポンサーはほとんど下りたし、ゲストも来られない、映画上映にしても日本の観客が本当にいつものように中国映画を観に来るかどうかも分からない、そういうふうに行われると、私も正直に悩みました。

話が変わりますが、日中関係が微妙なこうした時期は、日本文化、映画、音楽、アニメなどを好きな若者もすごく悩んでいます。

例えば、AKB48 が好き だという若い中国人はすごくプレッシャーを感じています。

「中国でAKB48のファンは、百度(中国の大手ネットサービス)のBBSユーザーだけで約10万人、実際はもっといるでしょう。彼らは年がら年中、ネットで好きなメンバーの情報収集をしたり、DVDを見たりしています。

熱狂ぶりは日本人のファンに勝るとも劣りません。みんなAKB48を通じて日本の文化を知り、日本について興味を持つようになった若者たちです。彼ら一人ひとり自称『プチ日本評論家』なわけです。こういう時に日中の板挟みになって、正直辛い気持ちだったと思います。

中国にいる日本映画ファンの人たちもそうでした。日本の俳優、監督は好きだけど、こういう時には中国に来て欲しくない気持ちです。

中国の俳優さんや、監督さんも10月の「中国映画週間」にはいろいろな事情で来られないことは残念に思いますが、日中問題が深刻な時に、もし日本へ来たら、逆に世論に批判されてしまいます。

こういう厳しい状況中で判断しないといけないので、結構悩みました。

でも、中止するのは簡単ですが、一旦中止になったら、継続できなくなる恐れもあります。やはり何があっても、映画ファンたちの期待を信じて、予定通り「中国映画週間」を行いたい。私がそういうふうに決めたら、いつも手伝ってもらう日本のスタッフ全員から電話やメールで、「今回のような特別な時に、中国映画週間を行うことの大変さは十分分かるので、私たちは今回無料で映画祭の運営に参加させてください」と、伝えてきました。

私は本当に感動しました。

10月15日に、中国から10作品のプリントを全部無事に届きました、まず一安心、チケットPRの売り行きを確認したら、一週間の上映スケジュール中に、満員となった回は何回もありました、それも嬉しかったことです。

10月20日午前中、いよいよ幕が開きました。第一回の上映は60%の入場率でしたが、午後の回と夜の開幕式は全部満員で、立ち見の人も結構いました。私は本当に嬉しくなりましたし、スタッフたちも喜んで、皆で抱き合っていました。

●開幕式の会場にはたくさんの映画ファンに来ていただいて、沢山の方々から開催を感謝されました。それを聞いて、私は涙がでました。私は主催者を代表して、皆様に次のような話をしました。

今年の中国映画週間は、日中関係が激動する時期に重なる開催になりました。しかし、困難な状況だからこそ、日本の皆様に「愛情」をテーマにした中国映画の傑作

をお届けすることは意義深いことになっていると思っています。上映する10本の新作映画は全部ラブストーリーです。

日中の政治の問題で、両国の国民の感情が深く傷付いたのは、誰もが心痛むことです。私たちは一刻でも早く以前のような友好関係に回復できるよう、心から願っております。

元々来日予定していた中国の著名な監督と俳優さんたちが全員来られなくなったのは、非常に残念に思います。しかし、中国の役者と監督たちの日本の中国映画ファンの皆様に対する愛情は変わりません。自分たちが制作、出演していた「中国映画」を是非日本の観客に観ていただきたいと期待しております。そして、またいつかきっと日本に来て、皆さまとお会いできるように信じております。

私たち日中友好映画祭実行委員会も、日中の映画ファンと一緒に力を合わせて、映画を通じて日中の人々の考え方や、感情を理解し、両国の間にある様々な障害を乗り越えて、共に揺ぎない友情の絆を築きたいと思っております。

その話をした後、会場内から沢山の拍手がたくさんありました。私も泣けそうでした。その後、劇場には日本の映画人が応援に駆けつけていただいて、たくさん暖かい言葉もいただきました。感動的な場面が続いていきました。

映画上映終了後に、友人からも祝福と励ましの手紙とメールが一杯送られて来て、本当に感激しました。やってよかった！

「日中映画祭」が日本と中国の映画ファン、日中友好を望む人々の「心の懸け橋」になることを切に願っております。私達はこのような映画や映画に関連する交流活動を通して、両国間の文化、経済、観光などの連携を促し、スクリーンを通してより多くの中国の人々に日本の新しいパワー、そして日本人の奥深い心の世界、生活習慣や価値観を理解してもらい、特に若者達の関心と理解が深まることを期待しています。このような真の友好親善関係の増進に微力ながら努めたいと存じます。

2013年は巳年であり、「巳」は物事が終結し、新たに出発する意味があります。また、蛇年は、再生の意味もあります。日中両国とも政権交代ですが、ヘビにあやかって「今年は日中関係の発展、領土問題を改善できるようにと願う関係者は多いと思います。」

13という数字は始まりの意味もあり、今年は物事の順序を立てて、新しい事情が始まる年であること。

そして、日中の友好関係、と様々な交流を「巳年」で新たに改善と発展できるように、皆で努力し、祈念したいと思います。

私自身はこれからも映画を通じて、日中の文化交流活動を続けますので、どうぞ応援していただければ幸いです。

—耿忠